

【4】まとめ

以上、「仏を上首とするサンガ」「仏弟子を上首とするサンガ」に関する資料の考察から、以下の事柄が明らかになった。

第1には、「仏を上首とするサンガ」は一連の論文で追及してきたような、この地上に存在するすべての仏教の出家修行者を包含する組織的な、あるいは理念的な「釈尊のサンガ」をさすのではなく、釈尊がもつ特権としての「善来比丘具足戒」で出家させた釈尊の直弟子を中心とする、1,000人とか1,250人と表現される比丘たちから形成される、羯磨をなしうる律蔵のいう具体的な「サンガ」を指すということである。

第2には、「仏弟子を上首とするサンガ」は「仏を上首とするサンガ」と同列の、これまた羯磨をなしうる律蔵のいう具体的な「サンガ」であって、聖典には舍利弗・目連、大迦葉・阿難など特別の弟子たちを「上首とするサンガ」しか現れないが、現実にはインド各地に名もなき仏弟子たちを「上首とするサンガ」も存在したであろうということである。

そして別論文でさらに十分な論証をすることが必要であるが、これら「仏弟子を上首とするサンガ」は一般に考えられているように、決して民主的平等に運営されていたのではなく、「上首」となっているリーダーの強力な指導下であって、それぞれがそれぞれの色をもっており、また決して構成員はそれほど流動的でもなかったということである。

このように「仏を上首とするサンガ」が「釈尊のサンガ」ではないということになると、今まで追及してきた「釈尊のサンガは存在したか」という問題に対する答えは、本論文によっても解決できなかつたということになる。そこでこの問題に答えようとしたのが、次に掲載する【論文14】の「『釈尊のサンガ』論」である。

以上